

Title	中世ヨーロッパにおける説教術書の研究：説教理論における〈説教の受容〉の問題
Sub Title	An analysis of artes preaedicatorum in the Middle Ages
Author	赤江, 雄一(Akae, Yuichi)
Publisher	
Publication year	2011
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2010.)
JaLC DOI	
Abstract	説教受容に対する説教執筆者の意識の問題に関連して、平成22年6月に名古屋大学で開催された第2回西洋中世学会大会の大会シンポジウム報告を行った。同報告は、査読を経て、論文として『西洋中世研究』誌上で刊行された。また、平成22年7月にスペイン・サラマンカで開催されたInternational Medieval Sermon Studies Society Symposiumにおいて本プロジェクトについて発表を行なった。
Notes	研究種目：研究活動スタート支援 研究期間：2009～2010 課題番号：21820037 研究分野：史学(西洋史) 科研費の分科・細目：西洋史
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_21820037seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820037

研究課題名（和文） 中世ヨーロッパにおける説教術書の研究：説教理論における 説教の受容の問題

研究課題名（英文） An Analysis of *artes preaedicandi* in the Middle Ages

研究代表者

赤江 雄一 (AKAE YUICHI)

慶應義塾大学・文学部・助教

研究者番号：50548253

研究成果の概要（和文）：説教受容に対する説教執筆者の意識の問題に関連して、平成 22 年 6 月に名古屋大学で開催された第 2 回西洋中世学会大会の大会シンポジウム報告を行った。同報告は、査読を経て、論文として『西洋中世研究』誌上で刊行された。また、平成 22 年 7 月にスペイン・サラマンカで開催された International Medieval Sermon Studies Society Symposium において本プロジェクトについて発表を行なった。

研究成果の概要（英文）：

Presented a paper at the Annual Meeting of Japan Society for Medieval European Studies, held at Nagoya University in June 2010, which was published later in the year on the peer-reviewed journal, *European Medieval Studies*, vol. 2. Made a presentation about the project at the International Medieval Sermon Studies Society Symposium, held at Salamanca in July 2010.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,070,000	321,000	1,391,000
2010 年度	580,000	174,000	754,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,650,000	495,000	2,145,000

研究分野：史学（西洋史）

科研費の分科・細目：西洋史

キーワード：西洋史、中世史、説教、受容、メディア、国際情報交換、イギリス

1. 研究開始当初の背景

説教研究あるいは説教史研究の重要性は、欧米においては過去 30 年ほどの間に急速に認められるようになってきた(*)。西ヨーロッパにおいて 13 世紀以降、説教は「活版印刷以前のマス・メディア」と呼ぶことができるほどの規模で行われるようになり、狭義の宗教思想といった文脈よりもはるかに広い歴史的な文脈のなかで考察される対象となってきた。国内においても、説教史料を大幅に活用した大黒俊二著『嘘と貪欲—西欧中世の商

業・商人観』（名古屋大学出版会 2006 年）の刊行に見られるように研究が進展しつつある。

* 説教研究概観および研究動向として The Sermon, ed. by Beverly Mayne Kienzle, *Typologie des sources du Moyen âge occidental*, 81-83 (Turnhout, 2000), Phyllis Roberts, 'Sermon Studies Scholarship: The Last Thirty-Five Years', *Medieval Sermon Studies*, 43 (1999), 9-18; Carolyn Muessig, 'Sermon, Preacher and Society in the Middle Ages',

Journal of Medieval History, 28 (2002), 73-91; Christoph Maijer, 'Sermons as Evidence for the Communion between Clergy and Laity', Bilan et perspectives des études médiévales (1993-1998): Euroconférence, 8-12 juin 1999 (Turnhout, 2004), pp. 223-243. 赤江雄一「中世ヨーロッパの「マス・メディア」—説教集を読む視角と方法—」『創文』498号。

本研究代表者は、書承文化が重要性を増しつつあるとはいえ、口頭における伝達の必要性が依然としてゆるがなかった中世ヨーロッパにおける宗教・社会・文化・コミュニケーションの理解の深化に有益な視角を提供するものとして、托鉢修道会によって生み出された説教あるいは説教関連資料の研究を行ってきた。

托鉢修道会に注目するのは、以下の理由による。すなわち、異端運動をも生み出すことになった12世紀の激しい教会改革運動を統制し、さらに民衆に正統信仰の定着をはかるために、教皇権は、13世紀に民衆への説教を主要な使命とする托鉢修道会の設立を支援した。托鉢修道会は、自らの修道士たちを優秀な説教者として教育・訓練し、その過程で、膨大な量と種類の説教著述支援著作を生み出したのである。中世盛期から後期における説教の革新を担った存在として、托鉢修道会は抜きん出ている。

多様な説教著述支援著作の諸ジャンルのなかで、過去30年間で特に研究が進展したもののひとつは、説教のなかで語られた教訓例話集(エグゼンプラ)である。もうひとつは、10万を超える写本が存在する範例説教集(説教者が自分の説教を著述する際に手本として参照する説教を集めたもの)である(応募者の博士(Ph.D)論文もこのジャンルに関するものである)。

他方、説教をどのように執筆するかについてのマニュアルである「説教術書」(*artes praedicandi*)のジャンルの研究は、それほど盛んに行われてきたとは言い難い。説教術書研究における現在の基準となっている業績は、現在も Th.-M. Charland in *Artes praedicandi: Contribution à l'histoire de la rhétorique au moyen âge*, Publications de l'Institut d'Études Médiévales d'Ottawa, 7 (Paris: Vrin, 1936)である。近年における重要な研究者は Franco Morenzoni (*)であるが、彼の研究の重点は13世紀の前半であり、それ以降の発展についての研究は概観にとどまっている。

* Franco Morenzoni, *Des écoles aux paroisses: Thomas de Chobham et la promotion de la prédication au début du XIII^e siècle* (Paris: Institute d'Études Augustiniennes, 1995); id.,

'La littérature des artes praedicandi de la fin du XII^e au début du XV^e siècle', in *Geschichte der Sprachtheorie*, ed. by P. Schmitter, vol. 3: *Sprachtheorien in Spätantike und Mittelalter*, ed. by S. Ebbesen (Tübingen: Gunter Narr, 1995), pp. 339-359, etc.

2. 研究の目的

日本学術振興会平成17年度特別研究員(PD)の研究課題「活版印刷以前のマス・メディアとしての托鉢修道会の説教の諸側面の研究」に取り組むなかで、本研究代表者は、説教理論と説教著述実践の関係を、説教術書と実際の説教とを比較することにより、説教術書は、説教執筆実践を高度なレベルで反映しており、したがって、これまでに考えられていたよりもはるかに高い史料価値を有するという成果を得た(Brepols社から2007年に出版された論文集で公刊)*。本研究は、この成果に基づいて、13世紀から15世紀の説教術書の研究を進めることを目的とした。具体的には、説教の受容者の説教に対する反応について、説教理論執筆者たちがどのような思考をめくらせていたかを、説教術書の分析から明らかにすることを目指した。

* Yuichi Akae, 'Between artes praedicandi and Actual Sermons: Robert of Basevorn's *Forma praedicandi* and the Sermons of John Waldeby OESA', in *Constructing the Medieval Sermon*, ed. by Roger Andersson (Turnhout: Brepols, 2007), pp. 9-31.

3. 研究の方法

説教にかぎらず、受容の問題を直接明らかにすることは史料上困難である場合が多い。しかし、説教理論執筆者たちは、説教がどのように聴衆に受け取られるのかを意識しつつ、理論書の著述を行っていたと考えられる。彼らの思考を精緻に追うことが問題への接近を許す可能性を追求したのである。この時期には説教形式の「進化」が見られたが、それ自体が、説教者たちの受容者の反応に対する意図的な対応であった可能性も検討できるだろう。研究者のあいだで説教術書ジャンルの発展において重要な著作と認識されており、この問題について光をなげかけると予想される著作が、13世紀後半にフランス(パリ)とイングランドで活動したフランシスコ会士ウエルズのジョンあるいはヨハネス(John of Wales/ Johannes Wallensis)が著した説教術書(未校訂・未刊行)である。本研究は、この著作に焦点を当てて、以下の3つを行った。

(1) ウェールズのジョンの説教術書の写本の網羅的収集および分析(あるいは校訂)

(2) 13世紀後期から15世紀にかけてすでに刊行されている主要説教術書の収集を行い、ベイスヴォーンのロバートが著した説教術書『説教形式』などとの比較検討などにより、ウェールズのジョンを、15世紀半ばまでの展開のなかに位置づける。

(3) 上記に関する研究発表および論文の公刊を国内外の学会・研究会あるいは国内外の学会誌上で行う。

4. 研究成果

説教の受容の意識化という観点から、ウェールズのヨハネスの説教術書に注目する本プロジェクトに関して、ヨハネスの説教術書写本の収集を継続して行いつつ、比較的良質であると判断される Bibliothèque Mazarine (パリ) 所蔵写本に基づく本文転写を踏まえて、これまでに入手できた他の重要写本との部分校合分析を進めた。

その結果として、例えば、15世紀の初期印刷刊本は、中世を通じて写本として流通していたテキストとはかなり異なっていることが判明した。すなわち、13世紀から14世紀にかけてのウェールズのジョンの説教術書の読まれ方と15世紀のその間には大きな違いがある。13世紀末から14世紀のテキストに焦点を当てることで、ジョンが、異なる聴衆のあいだの理解度をどのように見積もるかについて、思考を練っていたことが明らかになった。おなじ俗人といっても、当時の高度な教育を受けた人々に対してと、そうではない人々に対してでは、説教の著述のスタイルが大きく異なる。説教は、その場限りの即興というわけではかならずしもなく、しばしば聴衆のレベルに合わせて綿密に構成されていた。その場合、それぞれのレベルによって、説教内での聖書解釈の手続きの厳密さを変えるべきであるとジョンは論じている。

ただし、こうしたフレキシブルな対応は、それなりの帰結を招くことになることを、20年ほど遅れて著述されたベイスヴォーンのロバートの説教術書が示している。この説教術書には、しばしば大学にまで進みつつ、同時に民衆に説教を通じて語る存在であった当時の説教者たちの文化的相克の具体的な様相である。修道会付属学校や大学といった聖書解釈の厳格さを要求する学問文化と、わかりやすく耳目を引く説教を求める民衆文化とのあいだの相克が見られるのである。学のある聴衆からは、自らの解釈の妥当性を示さなければ聖書の恣意的な解釈だと自らの

権威を疑われ、しかし同時に聴衆の注意を惹きつけ権威を示さなければならない状況である。こうした状況の成立と展開の一端が、ウェールズのジョンの説教術書と、彼以降の説教術書にあらわれていると論じることができる。

こうした聴衆の理解度に対する説教者の見積もりに関して得られた知見に基づいて、本研究代表者は、平成22年6月に名古屋大学で開催された第2回西洋中世学会大会の大会シンポジウム報告を行った。同報告は、査読を経て、論文として『西洋中世研究』誌上で刊行された。

また、平成22年7月にスペイン・サラマンカで開催された International Medieval Sermon Studies Society Symposium において本プロジェクトについての発表を行なった。前述の Morenzeni らとの議論の中で、ウェールズのジョンの説教術書の重要性が確認された。

ヨハネスの説教術書写本の校訂公刊に至るまでにはいましばらくの作業が必要であるが、主要写本に関してはテキストの異同とそれが意味するものについて一定の全体像を得たと判断している。

また、中世に書かれた他の説教術書との比較のなかで、ヨハネスの説教術書の記述の重要性も明らかになった。以上の成果について平成23年度中に国内外での発表を計画している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

赤江雄一、中世後期の説教としるしの概念 14世紀の一説教集から、西洋中世研究、査読有、2号、2010、9-20

[学会発表](計2件)

Yuichi Akae, The Ars praedicandi Attributed to John of Wales (Jean de Galles) OFM and Its Influence, The 17th International Medieval Sermon Studies Symposium, 2010年7月17日、Universidad Pontificia de Salamanca サラマンカ(スペイン)

赤江雄一、中世後期の説教と「記号/しるし」の概念 14世紀の一説教集から、西洋中世学会大会、2010年6月27日、名古屋大学

6 . 研究組織

(1)研究代表者

赤江 雄一 (YUICHI AKAE)
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号 : 50548253